青少年くらしき
家庭版
発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

1月

ありのままの子育て 自立への子育て

～発達障がい（自閉症）の息子と共に歩んで～

「できないことを特訓して失敗したことから、できること、すなわち好きなことから広げていきました。ほめて自信をつけさせれば、できないことにも挑戦していきます。できることを広げていけば、できないことが少なくなっていくのです。」あおぞら共生会の副理事長、明石洋子先生による平成22年度特別支援教育に関する講演会の後編をお届けします。

子どもたちが「そんなこと言葉で言ったって徹ちゃん分かってないよ。」と言ったのです。子どもたちは徹之が分かっていないことを分かっているのです。一方、私はなんで分からないのだろう、なんでこんなに言っているのに分からないのだろうという視点に立っていたのです。子どもたちは、困っているのは徹之本人だと知っていたので、徹之が分かるようなやり方で、何から何までていねいに教えてくれました。私は、子どもは子どもの中で育つのだな、子どもは最初から子どもの立場を分かっているのだなと思いました。徹之は言葉が分からないから困るようなことをすると考えて、私は言葉の特訓をしたのです。それは、できないことをできるようにしないと幸せになれないという考えからです。結果、人嫌いになってパニックを増やしただけで失敗しました。では、どうしたらパニックを起こさなくてすむのか。言葉の代わりになるものを見つけよう。できないことには支援をしようと発想を変えました。子どもたちは工夫しながら付き合ってくれていたのです。大人の指示の抽象的な「きちんとしなさい。」ではなく、「ここに来てこちらに向いて立って。」というふうに具体的に教えています。言葉で分からないことは全部目で分かるように見本を見せています。だから、徹之は見て、まねてできました。それから子どもたちは肯定的です。私たちは否定的で、特に夫は「こら、余計なことをするな。」「勝手なことをするな。」と言いました。徹之には何が余計で、何が勝手か分からないのです。子どもたちはそんな言い方はしないで、「徹ちゃんこうしよう。」というように本当に肯定的なやるべき行動を示してくれるのです。徹之はなぜできないのだろうかを考えると、それは分かるような教え方をしていなかったということに気付きました。徹之は「これもできない。あれもできない。」と言われていましたが、できないのは分かってないからできないのだと分かりました。できないという前にどのようにしたら分かるのだろうかと、徹之が分かるような教え方を考えました。それが具体的、視覚的、肯定的なかかわり方なのです。そうすればやるべき正しい行動が分かるし、できるのです。できたらしかられません。逆にほめられます。そうすると人が好きになります。弟の政嗣を含めた子どもたちから学んだのです。できないことを特訓するより、伝え方を工夫して分かるようにすることでできるようになりました。徹之は自閉、パニック、自傷、他害など今はありません。でも、自閉症という障がい名です。当時は、自閉、パニック、他害などがあるのが自閉症と言われていました。徹之は五年ごとに異動しますが、異動先の上司が、徹之が笑顔いっぱいですごく素直なことにびっくりして「本当に自閉症ですか。」と言われたり、「なんで他害や自傷、パニックがないのですか。」と聞かれたりしました。パニック、他害、自傷、自閉というのはもしかすると、本人が不適切な支援を受けて不安とストレスで起こった障がいではないかと、徹之が小学校に入るまでにこれら強度行動障がいと言われるものを起こしたので、私としてはそのように考えていますとお答えしています。今では、これらの障がいは二次障がい、作られた障がいだと専門家も言っています。給食が食べられなかったし、襟にタグがついていると嫌だという感覚の異常はありましたが、徹之のようにパニックや他害、自傷というのはかかわり方次第で軽減されるし、改善されます。もしパニックや他害、自傷を彼に起

こさせようと思えばすぐできます。具体的ではなく抽象的に言い、視覚的な手立てを一切せず、全部言葉で言い、肯定的ではなく否定的な言葉を言い続けたら、一ヶ月もたたないうちにパニックや他害、自傷を起こすだろうと思います。

「障害者の権利に関する条約」に合理的配慮という言葉がありますが、自閉症の場合は思いに寄り添う支援をしないとこのような行動を起こすと思います。足の不自由な人に車椅子を降りて階段を登れとはだれも言わないけれど、知的障がい、自閉症の場合どのような支援をすればいいのか一見しただけでは分からないから、結局、足の不自由な人に車椅子を降りて登れと言うのと同じぐらい、無理強いをさせているのではないかと思います。小さいときの言葉の特訓など、山のような失敗をして徹之には悪かったなという反省の下に、クラスメートの接し方を参考に、常に徹之の行動を一生懸命に想像しながら支援してかなと常に想像力を働かさないと付き合えない。それで感性が豊かになり多様な価値観がもてる人間に育ったような気がする。教師になって、クラスの発達障がいの子どもは一割くらいですが、徹ちゃんのことを思うと、どのようにクラス運営をすれば楽しくやれるかなという視点で考えることができます。」と話したとありました。

「ゆめのどうぶつ」　きし下ななこ　中島小学校１年
はねがついたうさぎにのってあそんでみたいです。はねにハートのかざりをつけるところをくふうしました。（平成２１年度）

徹之のクラスメートが学校の先生になっています。新聞社の記者が特別支援教育の特集で徹之の取材に来たのですが、徹之よりクラスメートがどう感じたのかを取材してほしいと私はお願いしました。記事にはクラスメートが「徹ちゃんのお母さんは僕たちのおかげで徹ちゃんが明るくひょうきんでいられるとお礼を言われるが、むしろ感謝しているのは自分の方で、徹ちゃんが変なことをするのでどう

そのときのエピソードですが、徹之の学級には毎日ハプニングが山のようにあって、変化に富んだ授業だった。ある日、誰かが悪いことをして先生が雷を落として、教室がシーンとなって硬直した状況になった。そのときに、徹之が「なんまいだ、なんまいだ、チーン。」と言ったそうです。そうしたら先生が吹きだして、みんなも吹きだして、雰囲気がぱっと明るくなって、ポジティブな関係になって授業が進んだそうです。「徹ちゃんのおかげでクラスがいつも楽しくて笑いが絶えなかった。」とも話したとありました。

コーヒーの宣伝ではありませんが、「違いが分かる人」、今は、「違いを楽しむ人」というキャッチフレーズになっていますが、違いを理解し、違いを楽しむような人間性をみなさんにもっていただければ日本の社会も生きやすいかなと思っています。ぜひそのような教育をしていただきたいし、そのように教育されたら大人になったときに障がいのある人が「隣に住んでいても当たり前、隣で働いても当たり前」という社会になるのではないかと思っています。それから、少し違っているほうが楽しいのです。普通の子育てより徹之の子育てで人という財産をもらったし、変化に富んだ人生をすごく楽しめたような気がします。だから違いを楽しむ先生でいてくだされば、子どもたちも違いを楽しむような大人に成長するのかなと思っています。

終わりに、「ありのままの子育て」「自立への子育て」「お仕事がんばります」の三冊の本の中に、いろんな実例、プログラム、地域の方への説明文をのせています。また、悩んでおられる保護者の方には、言葉の伝え方なども参考になるかなと思います。

今後ともご理解とご支援をよろしくお願いします。

（終わり）

青少年に関する相談
電　話　(086)426−3741
メール　young-kokoro@kurashiki-oky.ed.jp
生涯学習課　倉敷市青少年育成センター